

教師のモチベーションとストレス及び

ソーシャルサポートの関係

サブタイトルが、メインタイトルとの関連性がなく、突飛な印象

—WEB 調査システム構築による質問紙法の ICT 化に向けて—

M16075B 原 淳 ★

構成概念(モチベーション, ソーシャルサポート)の定義は要るか?

【研究背景】

教師の人口構成と若手教員の孤立

第 2 次ベビーブーム世代が学齢期に達した 1980 年前後、児童生徒の増加に対応するため大量の教員が採用された。この大量採用層がずっと教員平均年齢を押し上げてきたが、現在この層が定年退職時期を迎えており、その穴埋めのため新規採用者が大幅に増えている。つまり小学校から高校の教員は、大量採用の分厚い 50 代のベテラン層、そのあおりで極端に数が少ない 40 代と 30 代後半の中堅層、再び増えている 30 代前半から 20 代の若手層という「ひょうたん型」のアンバランスな構成になっている。また、学校現場では、中堅層が主任クラスになって非常に多忙なうえに数が少ないため、若手の面倒を見たり、ベテランと若手の橋渡しをしたりすることに手が回らず、その結果、「若手教員の孤立」という状況が一部で起きている。

また、視線やしぐさだけで騒いでいる子どもたちを鎮めるような、現場の長い経験の中で上から下の世代へと受け継がれていく日常的な指導技術について、ベテラン層の一斉退職により、若手教員に継承されない可能性が学校関係者の間で懸念され始めている。(新井,2014)

教員の多忙化と負担感。

文部科学省の「教職員のメンタルヘルス対策検討会議」がまとめた最終報告(「教職員のメンタルヘルス対策について(最終まとめ)」2013)によると、従来から指摘されてきた多忙化による疲労の蓄積に加え、多様化・深刻化する児童生徒の問題行動に関する生徒指導や保護者からの苦情等への日常的なストレスにさらされた結果、「うつ状態」などに陥って病気休職となるケースが増加していると報告している。一方、「文部科学省 学校現場における業務改善のための ガイドライン 2015」によると、国や教育委員会からの調査やアンケートへの対応に関する業務の負担感率は小・中学校ともに、80%を超える状況であるほか、保護者・地域からの要望・苦情対応、給食費や学校徴収金に関する未納者への対応等の業務、文書管理等に関する業務が挙がっており、校務支援シ

ステムの導入等が急がれる。

モチベーションとソーシャルサポート

教師の仕事においては、日常的に、①子どもの人間関係、②保護者との人間関係、③教師間の人間関係、という 3 つの複雑な人間関係に取り囲まれており、特に、子どもや保護者との関係が悪化した場合には双方にとって大きなストレスとなる。仮に子どもや保護者との関係がこじれた場合でも、教師間の人間関係が良好で、協力的に解決を図ろうとするサポートイブな雰囲気と体制が職場に確立していれば、モチベーションを低下させずに困難な状況に取り組んでいくこともできる。しかし、教師間の人間関係が崩れ、孤立化が進んでいる場合には、職場の人間関係そのものがストレスとなり、子どもや保護者との関係の悪化がメンタルヘルスに直接的に影響を及ぼすことになる(新井,2014)。

貝川(2009)は、教師バーンアウトに影響を及ぼす要因として、職場内での組織特性や個人が持っているソーシャルサポートを取り上げ、それらがどのような影響を与えているかを分析し、次の 2 点を明らかにした。一つ目は、学校の職場環境という学校組織特性がバーンアウトへ直接悪影響を及ぼすことであり、二つ目は、情緒的サポートを得ることでバーンアウトを緩和できるが、道具的サポートはバーンアウトに影響を与えないことである。以上の結果から、教師バーンアウトを軽減するためには、職場の管理職や同僚との関係をよりよくしていくとともに、情緒的サポートを得られる環境を組織的に整えていくことが望まれると提言している。

教師のストレスコーピングに対してはメンタルヘルス研修なども数多く提案されている。しかし、それ以前に現場では多くの事務処理などを抱えており、教師自身の家庭要因に起因するストレスなども複雑に絡み合っている。(金川,2009)

教師本来のモチベーションを維持する仕事時間を確保するためには、いかに効率的な環境を整備するか、そのためにはどのような資源やサポートがあればよいのか、あるいは、何を削減すべきかなどのニーズを把握する観点から問題を分析

していかなければ、多忙感軽減としての有益なフィードバックにはつながらないと思われる。

【目的】— 簡潔するため1つに絞るか？

本研究の目的は次の3点である。

はじめに、教師のモチベーションを低減させる多忙感と、その影響を軽減するソーシャルサポートとの構造を分析した後、結果を現場へフィードバックすることで、学校関係者間における役割調整の一助になることである。

次に、教職を目指す学生が遭遇するであろうリアリティ・ショックに対するストレスコーピングのヒントになることである。

最後に、Web 調査システム構築による質問紙法の ICT 化へ貢献することである。

【方法】

予備調査 1

目的：尺度の作成。①多忙感を感じるストレスサー②コーピング③期待するソーシャルサポート

調査協力者：縁故法,A 県に勤務する公立小中学校教員約 40 名

手続き：

1. 自由回答 Web 調査法及び質問用紙配布の選択制による質問項目・補助項目のプール。
2. KJ 法,テキストマイニングなどによる質問項目の作成。
3. 作成した質問を Web 化したものについて現職教員を含む心理学系大学院生に対して評価(情報量、デザイン)を求め改善を行う。

調査内容： 1.多忙感を感じる仕事 2.対処行動 3.期待する資源・サポート 4.削減を期待する業務

予備調査 2

目的：現職教員との比較群として。

調査協力者：縁故法により大学内での協力者を募る。A 大学に在籍する小中学校教員志望進路の大学生大学院生約 100 名

調査期間：2017 年 4 月 6 日～4 月連休前予定

手続き：Web 調査法

調査内容：

- 1) フェイスシート:性別、年齢、希望学校種別(小・中・高等学校・特別支援学校)
- 2) モチベーション尺度(金川,2009)

本調査

調査協力者：縁故法により関連団体を通じて協力者を募る。A 県に勤務する公立小中学校教員約 300 名(回収率約 40%を想定)

調査期間：2017 年 5 月連休明け～6 月末予定

手続き：Web 調査法と質問紙法(郵送法)の併用

調査内容：

- 1) フェイスシート:性別、年代(20・30・40・50)、学校種別(小・中・高等学校・特別支援学校)、

2) 予備調査 1 にて作成する尺度

3) モチベーション尺度(金川,2009)

4) ストレス反応尺度(DASS or CES-D or Else?)

フィードバック調査

目的：謝辞及び本調査結果の満足度調査。

調査対象：調査協力者

調査期間：2017 年 9 月予定

手続き：Web 調査法と質問紙法(郵送法)の併用

調査内容：

結果フィードバックに対しての満足度等。

【今後の課題】

— 必要か？

1. 更なる先行研究の精読(多忙感の両価性等)
2. ストレス反応尺度の選択
3. 質問紙作成における信頼性、妥当性の検証レベル(社会的望ましさ等の考慮を含む)
4. 補助項目として 2 項モデル(フィッシャーの正確確率検定,ロジスティック回帰分析)導入の検討
5. マルチデバイス(スマホ・タッチパネル等)対応画面デザインと質問項目の構成
6. 教員の ICT 環境調査(メールアドレス普及率、LAN 普及率、教員一人当たりの PC 台数等)
7. セキュリティ対策の実装と説明書の作成、及びシステム環境構築後の倫理委員会承認
8. 比較群として民間企業社員を母集団としたサンプル収集と調査の検討
9. 構築した Web システムをオープンソースとして汎用パッケージ化し公開する手順

【倫理的配慮】

調査実施にあたり、団体の代表者及び学生には研究についての説明をし、実施許可を得る。参加者へは、研究の参加は自由であること、無回答や途中で辞めることも可能であること。プライバシー保護の説明を記した案内文と初期画面を作成し同意を得てから参加開始できるように徹底する。

【主な引用・参考文献】

1. 新井 肇, 2014, 教師のメンタルヘルス-その実態と課題, 児童心理 2014 年 8 月号臨時増刊, 金子書房, No.990 p.1-010
2. 金川 悟, 2009, 教師のモチベーションとメンタルヘルスの関係-不安と抑うつに焦点をあてて-, 平成 21 年度学位論文, 兵庫教育大学大学院.学校教育研究科.学校教育学専攻.臨床心理学コース
3. 貝川直子,2009, 学校組織特性とソーシャルサポートが教師バーンアウトに与える影響 1), パーソナリティ研究 2009 第 17 巻第 3 号 270-279

(指導教員名：野田哲朗)